



昨年10月、EUの農村開発政策の手法として注目されているLEADERプログラムについて調べるべく、ドイツとイギリスを訪ねた。ドイツでは連邦農業研究所（FAL）の研究者であり、昨夏、JSPSサマープログラムにより当所に滞在していたアンドレア・プーファールさん（以下、アンドレアと記す）、イギリスでは元ブリストル大学教授で訪日体験も何度かあるバーナード・レインさんのお世話になった。お二人がいなければ、プログラム実施地区での調査は難しかったであろう。研究成果は別途まとめる予定なので、ここではアンドレアの男友達についての、ややくだけた話を書くことをお許しいただきたい。

お友達の一人はトマスさん、フォルクスワーゲン社の顧問弁護士である。アンドレアとは同じデッサウ市（旧東ドイツ）出身の仲である。彼女の滞在中に安売りチケットを買って突然来日し、一緒に東北を回ったというので、どういう人が興味津々だった。調査初日の晩、アンドレアと一緒にブラウンシュヴァイク中央駅発の急行に乗ること20分、フォルクスワーゲン（VW）発祥の地であるヴォルズブルクに到着。駅でトマスさんのお出迎え。友達の友達ということでいきなりduzen（注：ドイツ語の二人称にはSieとduがあり、親しい間柄ではduを使う）。VWの設立は1930年代。それまでこの一帯は畑と草地の広がる農村だった。VWの敷地内のレストランで夕飯をとる。トマスさんは御年37歳。もともと自動車修理工だったが、1989年の壁の崩壊で職を失ったため、夜間学校と大学で猛勉強し、弁護士の資格をとった。独身で現在は彼女もいない。アンドレアとの関係について尋ねたところ、同じデッサウ市出身の友

達の紹介で知り合い、次第に仲良くなったとか。8月の日本旅行は2日前に決めたとか。節約のためにユースホステルも相部屋だったそうで。

もう一人のお友達はヨハネス・ホルツナーさん、アンドレアの彼氏である。ヨハネスさんはドイツ南部フライジング市郊外で450年も続く農場の長男である。御年30歳、アンドレアの2歳上である。金曜日の午後、農場を訪ね、案内していただいた。もちろんduzen。ホルツナー家の農場はここと、30kmほど離れた所にもう一カ所ある。農地は全部で200haあり、うち3割は借地である。草地と放牧地が30ha、残りは畑地。畑ではビール用の小麦と飼料用トウモロコシを作っている。ほかにバイエルン州の農業環境プログラムKULAPの土壌流出防止措置のため、秋から冬にかけて芥子を植えていて、すでに黄色い花が咲きかけていた。家畜は牛と山羊を飼っている。大きな母屋は二階建てで、一階は台所、居間、作業場、二階は寝室、そのうちの一つがアンドレア専用である。

ヨハネスさんとはこの日の晩、アンドレア、女友達のカリンさんも交えてフライジング市内の居酒屋で飲み、アンドレアの日本滞在中の話でしばし盛り上がった。自動改札機、ウォシュレットに代表されるハイテクがある一方、電車の乗り換え案内がわかりにくいなど古くさく不効率な部分もある、というのが彼女が日本に対していただいた印象。日本人の男は見た目で見えなくなるとか、話がつまらないとか、全体に女性の方が魅力的で、どうりで日本人女性と欧米人男性の組み合わせはよくあるが、逆は珍しいとか、言いたい放題である（注：話のつまらなさに関しては当所にも例外が数名いたそうです）。

二人の馴れ初めは、ヨハネスさんがドクター論文を書くためにFALに1年ほど滞在していたことから。もはや家族同然のつきあいだが、この先どうなるのかはわからない。ヨハネスさんと結婚して大農場を切り回す主婦になるのか、いまの仕事続けるのか、微妙なところだ。何事にも果敢に取り組み彼女のこと、どう転んでも明るくたくましく生きていくことだろう。